

繭から着物 一貫手作り

県内で数少ない養蚕農家の花井雅美さん(46)＝山鹿市鍋田＝が、県出身の染織家ら3人と、生糸の生産から織りまで着物の完全手作りを果たした。昔ながらの手作りは現在では極めて珍しく、花井さんらは「養蚕や着物の魅力が見直されるきっかけになれば」と期待している。

山鹿市の養蚕農家ら4人挑戦

熊本はかつて西日本一の養蚕県 場などに出荷している。

で、昭和初期には養蚕農家は約7万 市出身。2012年に建築会社を辞れて現在は山鹿市の2戸だけになって両親の故郷の山鹿に移住し、養り、ほそぼそと繭を群馬県の製糸工 蚕を始めた。「紀元前から人類が蚕



山鹿産の繭から手作りした着物「Blue Blessing」。前列左から時計回りに、養蚕農家の花井雅美さん、生糸作りの中島愛さん、染織家の吉田美保子さん、ライターのア達絵里子さん＝山鹿市

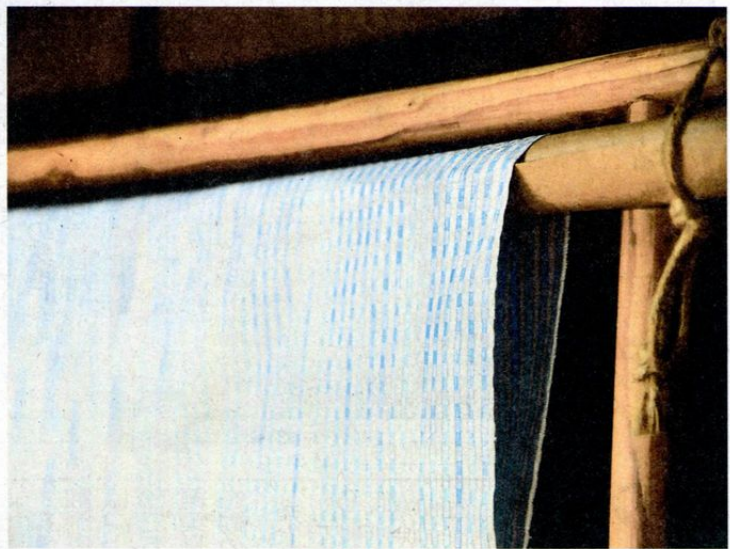
純国産 昔ながらの手法で

を飼っていた歴史や、飼育技術の奥深さにはまっている」といい、現在、人工添加物を与えない伝統的な手法で年間約5万5千匹の蚕を育てる。約1年前、知人で着物専門誌ライターの安達絵里子さん(53)＝熊本市＝から、同市出身の染織家、吉田美保子さん(53)＝神奈川県＝を紹介されたのをきっかけに、着物の完全手作り計画がスタート。現在は皇室以外ではほぼ途絶えており、「挑む価値に意気投合した」と花井さん。

吉田さんは、熊本の豊かな湧き水をイメージしたデザインを考案。中島さんの生糸を白や青に染め、淡い格子模様にした。反物から着物に仕立て、「Blue Blessing」(青の祝福)と名付けた。訪問着に近い感覚で着こなせるという。4人は7月中旬、花井さん宅に集まり、完成した着物を確認した。花井さんは「水の流れがきれいに表現されて感動した」。吉田さんらは「貴重な体験ができた」と出来栄に満足だった。作った1着はインターネットで、100万円程度で購入希望者を募っている。

4人の活動は、安達さんが雑誌「婦人画報」のサイトや投稿サイト「note」などで進捗状況を随時紹介。和装愛好家らから注目を集めてきた。

既に準備を始めた第2弾では、購入希望者の要望に応じたデザインや生糸の性質などにする予定。花井さんは「国内で養蚕や純国産の着物作りが途絶えないよう、将来につながる活動をしていきたい」と意気込んでいる。(猿渡将樹)



繭から手作りした着物「Blue Blessing」の袖部分。淡い格子模様が織り込まれている

クローズアップ